新潟県胎内市（国内 79 例目）の高病原性鳥インフルエンザ発生農場に係る
疫学調査チームの現地調査概要

令和５年３月 12 日に実施した現地調査により、以下のことを確認した。

１　農場の周辺環境・農場概況

① 当該農場は、国内 78 例目の農場から北に約 500m に位置している。
② 当該農場は、平野部に位置し、付近は水田や林に囲まれている。
③ 当該農場には成鶏舎が５棟あり、いずれも２階建てのセミウインドウレス鶏舎であった。各鶏舎には、背中合わせの直立８段ケージが４山あり、１ケージ当たりの飼養羽数は６羽程度であった。
④ 発生鶏舎は５棟のうち最も北に位置していた。発生鶏舎の換気は、外気温に応じて鶏舎側面のロールカーテンの開閉及び鶏舎奥側のファンの稼働が自動で行われているとのこと。調査時には、日中に２階の窓のロールカーテンが上部 30～40cm 開いた状態で、ファンは回っておらず、鶏舎横の窓から入気しモニター部から排気される自然換気を実施していた。
⑤ 発生時には、5鶏舎すべてで採卵鶏が飼養されていた。

２　通報までの経緯

① 飼養管理者によると、発生鶏舎の１日当たりの平均死亡羽数は約 50 羽であった。発生鶏舎は、日齢が高いこと（通報時 793 日齢）及びワクモの影響により元々他の鶏舎より死亡羽数が多い鶏舎だが、まとまっての死亡はなかったとのこと。３月 11 日午前中の健康観察の際に、発生鶏舎の２階最上段、最南側の山の内側の列、中央付近の１ケージで、６羽中５羽のまとまった死亡が確認されたことから、家畜保健衛生所に通報したとのこと。
② その後、家畜保健衛生所の職員とともに発生ケージを確認したところ、同ケージ内の残りの１羽も死亡していたとのこと。この時点では周辺ケージでの死亡は確認されなかったとのこと。
③ 調査時には、発生ケージの周辺ケージ及びグレーチングを挟んだ１階のケージの数か所で死亡鶏や元気消失を示す生存鶏が認められた。発生鶏舎の他の場所では、まとまっての死亡等の異状は見られず、隣接鶏舎でも異状は見られなかった。

３　管理人及び従業員

① 飼養管理者によると、当該農場には 17 名の従業員がおり、このうち７名が鶏舎内での飼養管理を行い、その他の 10 名は、鶏糞処理や集卵作業等に従事していたとのこと。鶏舎管理を行う従業員は、その日毎に担当鶏舎が決められ、同日に他の鶏舎で作業をすることはないとのこと。

４　農場の飼養衛生管理

① 車両出入口は農場入口の１か所のみで、入口で全ての車両について消毒ゲートで上下左右からの消毒を実施し、衛生管理区域に入っていた。
② 従業員は、ＧＰ兼更衣室棟の入口で踏み込み消毒及び手指消毒を行った後、棟内用の靴に履き替えてから入棟し、農場専用の作業着を着用していたとのこと。
③ 飼養管理者によると、鶏舎管理担当の従業員は、ＧＰ兼更衣室棟から連絡通路により鶏舎に向かい、外に出ることなく鶏舎に入るとのこと。その後、鶏舎入口で鶏舎専用長靴への履き替え、踏み込み消毒、衣服の噴霧消毒及び手袋の装着を行うとのこと。なお、鶏舎管理担当が担当鶏舎に向かう際は、各鶏舎間を繋ぐ連絡通路を使って移動しており、各鶏舎を通過する度に長靴の交換、手袋の装着を行うとのこと。

④ 飼料運搬業者や集卵業者は、車両消毒ゲートの近くに設置された来場者用更衣室で手指の消毒、農場専用の作業着と長靴を着用し、運転席には消毒済みのフロアマットを敷くとのこと。
⑤ 農場敷地の境界には一部を除き塀や電柵が設置され、農場入口に立ち入り禁止表示がされていた。農場内の車両の通行路及び鶏舎周囲のアスファルトには消石灰が散布されていた。消石灰は週１回程度散布していたとのこと。
⑥ 飼料タンクは各鶏舎の横に設置されており、上部には蓋が設置されていた。飼料の搬入は毎日行われるとのこと。
⑦ 飼養鶏への給与水は次亜塩素酸により消毒した井戸水を使用しており、年１回の定期検査も実施しているとのこと。水のタンクには蓋が設置されているとのこと。
⑧ 飼養管理者によると、鶏舎ごとにオールイン・オールアウトを行っており、オールアウトのたびに鶏舎内の清掃・消毒を行っていたとのこと。最近の導入、廃鶏出荷はなかったとのこと。
⑨ 死亡鶏は、各鶏舎の担当者がポリバケツに集めて各鶏舎前室に置いておき、１日１回自社のショベルカーで回収し、コンポストへ投入するとのこと。
⑩ 鶏糞はコンベアでダンプに積載され、堆肥舎へ運ばれるとのこと。鶏舎からダンプ集積場所までの建屋外を通るベルトラインには覆いが設置されており、除糞ベルト出口には手動のシャッターが設置されていた。鶏糞ベルトは鶏舎毎に４日に１回程度の頻度で稼働させるとのこと。
⑪ 堆肥舎においてコンポストで処理された堆肥は、農場北部のペレット工場へ搬出されるとのこと。なお、同ペレット工場には新潟県内のグループ会社３農場からの堆肥も搬入されるとのこと。堆肥搬入車は、ペレット工場への出入りの際、消毒ゲートで車両消毒、専用長靴への履き替えをしていたとのこと。
⑫ グループ会社の他農場との間で従業員の行き来はないとのこと。重機等の移動も最近はないとのこと。
⑬ 管理獣医師は定期的には訪問せず、また、冬季には農場内には入らないとのこと。

５　野鳥・野生動物対策

① 調査時、農場隣接地に湿地があったが、水は浅く、野鳥の飛来は確認されなかった。
② 調査時、農場内に小型の野鳥が飛来していたが、鶏舎内への侵入はなかった。また、カラスが農場上空を飛来していたが、農場内への侵入はなかった。
③ 農場内ではネコやイタチを見かけるが、鶏舎内への侵入はないとのこと。
④ 鶏舎内ではよくネズミを見かけるとのこと。調査時、鶏舎内でネズミ類のものと思われる糞が確認された。ネズミ対策として殺鼠剤を使用しているとのこと。
⑤ 農場隣接地の草を食べさせるため、アルパカ数頭及び山羊約 20 頭を飼養しているが、農場内へこれらの動物が侵入することはないとのこと。また、最近は降雪等により放牧は行っていないとのこと。
⑥ 農場周囲の電柵は冬季は通電していないとのこと。
⑦ 集卵ベルトはすべて建屋の中を通り、屋外に開放している箇所はなかった。

（以上）